

史料紹介 大坂町人平野屋武兵衛の「例歳式目帳」(全文翻刻)

中 川 すがね

解 説

平野屋難波武兵衛は大坂天満老松町の町人、大坂の本両替仲間の内でも十本の指に入る平野屋江森孫兵衛の別家の二代目である。彼は幕末から明治にかけて膨大な書籍と番付・上方絵などの摺物とといった第一級のコレクションを形成し、幕末大坂の政情や人々の暮らしを活写した日記、九州鹿島への旅行記、やはり歌の留書などすぐれた記録を多数残した。

その史料の多くは御子孫から大阪大学文学部日本史研究室に寄贈された。目録として『難波家(平野屋)史料目録』^①が刊行されており、記録の一部は史料集『幕末維新大阪町人記録』^②に翻刻されている。私は難波家(平野屋)史料の整理・目録整理や史料集の刊行に深く関わり、史料集や目録の解題を執筆し、何点か論文を執筆し

た。^③平野屋武兵衛は、私に近世大坂のありさまについて教えてくれた恩人であり、私が史料を通して知り合った中で最も魅力的な人でもある。

私はその後、どういいういきさつからか、古書店に売りに出されていた平野屋武兵衛関係の史料数点を偶然購入することができた。いづれ大阪大学所蔵の史料といっしょにするべきものであるが、まずはこれまでの深い御縁を鑑みて私の手で翻刻し、その内容を順次紹介することにした。

本史料紹介はその第一弾として、平野屋武兵衛作成の「例歳式目帳」全文を翻刻し、それに注釈を加えたものである。原史料は翻刻の最初に載せた概略図の通り半紙判の横長帳で、表表紙には安政二年(一八五五)正月という年月と例歳式目帳という表題が記されている。裏表紙には「老松町平野屋武兵衛」と作成者である二代目武

兵衛の名が記されている。

この史料が最初作成された安政二年に、享和元年（一八〇一）七月八日生まれの武兵衛は、五十五歳前後であった。武兵衛の生涯やその残した史料については前掲『難波家（平野屋）史料目録』の解題が詳しいので、参照されたい。

父の初代武兵衛（法名釈元證）は岡山下津井から出てきて平野屋孫兵衛の奉公人となり、火事を防いだ功績により別家に取り立てられた。二代武兵衛はその次男として大坂で生まれたが、兄が早世したため文政元年（一八一八）に亡くなった父のあとをついで一六歳で家督を継いだ。文政十二年には主家の住み込みから「宿這り」といわれるような別宅が許され、天保元年（一八三〇）に最初の結婚をしている。しばらく借屋住まいであるが、嘉永四年（一八五二）に天満老松町に七三坪余の家屋敷を購入して家持町人となった。

「例歳式目帳」が作られたのはそれから四年後である。この時あと継ぎの長男である駿七は嘉永四年にすでに元服してはいるものの主家に住み込みの身でまだ一人前とはいえ、武兵衛が家長としての責任を負っていた。本家の平野屋孫兵衛方では幕末には老分といわれる通勤の重役として大名貸関係の仕事をするなど、奉公をし遂げて出世を果たすが、そのかたわら自宅で白粉製造に乗り出したり、隣家を購入して家屋敷を拡大して借屋経営を行うなど経営の多角化

にも意欲的であった。

武兵衛家では幕末には余暇には芝居や見世物を楽しむなどゆとりある生活が達成されている。しかし「例歳式目帳」で正月二日の女房の別家への挨拶が「近来御趣意之節は勝手事」としなくてもよいことになっているように、おそらく開港後の政情不安や物価高騰により家事の引き締めが必要となり、本家ともども儉約を行う必要があった。「例歳式目帳」は晴れて家持町人となった平野屋武兵衛が、安政二年に家内の年中行事や法事を引き締めるため、その費用や料理の献立などを細かく記したものである。また三味線や子供の手習いの師匠への祝儀、下人・下女・乳母といった家事奉公人や、居住町する老松町の町年寄・町代や町出入の非人への心付けなども規定されている。

また安政二年よりあとに行われた先祖の法事や報恩講などについても、追記されている。たとえば安政五年の餅つき関係の記載では「室」・「こし場」などに対して鏡餅が供えられていることから、自宅裏での白粉製造の開始に際して祀った稲荷神に対するものと考えられる。安政二年の規定にあてはまらなかったり、変更点のあった場合は新たな追記され、明治二年（一八六九）まで書き継がれている。武兵衛は明治四年に七一歳で隠居しているので、後半生を通して書き綴られたものといえる。

「例歳式目帳」から、私たちは平野屋武兵衛という大坂町人の生活ぶりや儀礼について詳しく知ることができる。武兵衛は元治元年(一八六四)などの日記を残しているが、家内の日常的な記事は少ない。日記からは武兵衛が仕事上料亭などに入入りし、家族ともたびたび外食していることがわかるが、家で何を食べたかなどはほとんど記されていない。逆に「例歳式目帳」はあくまで家内の節約のための規定だから、必ずいつも守られたとは限らない。両者をあわせてはじめて武兵衛の生活のありかたがわかるのである。

江戸時代の人々にとって冠婚葬祭は重要な節目であると同時に、費用のかかる事柄でもあるため、儉約のためにこまごまとした規定を定めることがある。ただ町村や豪商の家の規定は残されることが多いが、武兵衛のような中堅クラスの町人のものはあまりない。長者番付に登場するような豪商ではないが、一割程度しかないといわれ、大坂の経済や社会の要をなしていた家持町人たちは、どのような意識を持ち、どんな生活をしていただろうか。「例歳式目帳」は、こうした疑問に多くの示唆を与えてくれる史料であり、今後活用していただければ幸いである。

「例歳式目帳」は家内の決めごとであるので、安政二年当時の武兵衛の家族について説明しておいたほうがよいだろう。すでに述べたように武兵衛の父は早く亡くなり、母のたか(法名妙徳)もすでに

に亡くなっている。また武兵衛は正式には四度の結婚をしており、二人とは死別、一人とは離別したが、多くの子供に恵まれた。

まず天保元年におう(すず、播磨屋筒井七郎兵衛娘、法名妙薫)と結婚し、天保五年に長男駿七が生まれたが翌年死別し、天保七年九月にいく(上田次右衛門娘)と再婚したが暮に離別している。天保十年に蓮(鹿島屋鹿島卯之松姉、法名妙蓮)と再婚したが、その間天保九年に松屋新兵衛の娘で内縁の辰との間に、長女の智恵が生まれている。智恵は弘化四年(一八四七)に大和屋小右衛門の養女となり、嘉永五年(一八五二)には平野屋震三郎、安政三年には才網屋卯兵衛に嫁しているので、「例歳式目帳」段階には武兵衛方にはいない。しかし「例歳式目帳」には智恵の誕生日の七月十日の記載に「未疱瘡不致」と天然痘をすませていない気がかりが書き付けられ、他家に出した娘のことを気にかけていることがわかる。安政六年に智恵が亡くなると、妙浄という法名が「例歳式目帳」に追加され、法事が営まれるようになっていく。

三人目の妻の蓮は嘉永六年に没し、「例歳式目帳」の時の武兵衛の妻は、前年に再婚したきた(絹、天野屋丸山正蔵姉)である。この他の家族としては、長男の駿七、蓮の生んだ次女つた(天保十三年生、安政二年中に高津屋林伊右衛門に嫁)、三女のついで(天保十五年生)、三男の虎之助(弘化五年生)、四女ふさ(嘉永三年生)が

いる。まだ幼い子もいる子だくさんの家族である。このほかに二男の十九歳（天保十一年生、法名元信）がいるが、弘化五年に井上屋の養子に出され、安政元年に早世している。

武兵衛は同居の家族について各人の誕生の時やそれに基づく暦のデータを記し、各人の誕生日を祝っている。また武兵衛家では子供・下男・下女といわれる家事奉公人が住みこみで働き、子供が小さい時には乳母も雇われていた。「例歳式目帳」には文久二年（一八六二）と元治元年の宗旨請状に記された人別が写されている。前者では武兵衛ときたの夫婦に息子の駿七と虎之介（助）、娘のこの、駿七の息子の福太郎が家族として記され、この他に下女三人と下人一人の名前が記されている。後者では下女のすえが駿七の妻となっており、福太郎はおそらく二人の間に生まれたのだろう。この他に下女二人、下人二人の名前がある。

【全文翻刻】

凡例

- ①原則として、原史料通り改行したが、文章として続いたり、各行が短い場合は追い込みで表示した場合がある。また上下の位置関係などは整えており、原史料通りではない。
- ②必要に応じ、本文右側の傍注（ ）内に読みがなや漢字などを補っている。
- ③適宜注を加えて解読を助けているが、不明の部分もあり、今後の研究を待ちたい。難読部分は□で示している。

（表紙概略図）



正月元日

- 一 床懸物^④ 植松殿小松引^⑤
- 前二、福寿草

新座敷

- 一 床懸物 吳山^⑥ 日の出
- 前二、人丸^⑦ 置物
- 花生 梅の花

山草^⑧ 敷

- 一 御佛前 御鏡餅二重
- 折敷^⑨ 葉附ミかん・昆布
- 切懸ニして

- 御佛器^⑩ 餅、生二而一ツ
- かやく^⑪ 焚候て
- お備申上候事^⑫

- 御花 松竹梅 代拾五文
- 御文 或人曰ク^⑬

山草敷

- 一 荒神様^⑭ 御鏡三ツ
- 切懸昆布・太^⑮
- こまめ

山草敷

- 一 神明様^⑯ 御鏡二重
- 切懸昆布、葉附ミかん
- こまめ
- ×

山草敷

- 一 稻荷様 御鏡二重
- 切懸昆布、葉附ミかん

- 一 大福^⑰ 上茶 小梅一ツ

一 雑煮⁽¹⁶⁾

かやく

焼かちん⁽¹⁷⁾

大こん

くしがひ⁽¹⁸⁾

里いも

やき豆腐

こんぶ

平かつを⁽¹⁹⁾

べ七色

山草敷

焼物

塩小鯛

いわし

木皿

牛蒡

数の子

右御膳ニ居り、箸取先相祝⁽¹⁶⁾、夫^(それ)方家内とそ酒^(原巻)にて年酒⁽²⁰⁾いたす、組重にて
右祝相済候上、自分・駿七⁽²¹⁾ 御本家江御祝ニ出勤之事

一 表礼場

二枚折屏風⁽²³⁾

毛氈・手札入⁽²²⁾

昼祝

向繪⁽²⁴⁾

大根

白めし

かつを

青ミ

焼物

鰯

汁見合

酒^(さむ)いり⁽²⁵⁾

夕節会^(せちま)

常之通⁽²⁶⁾

二日朝

积元證様初退夜^(たい)⁽²⁷⁾

御華^(はな)・供物上ル事

向木皿

牛蒡

かづのこ

昼

雑煮

すまし

焼かちん

水菜

向鱈 なし

汁見合

平皿²⁸⁾

水菜

身くじら²⁹⁾

夕節会

常之通

今日御本家始、別家中江女房礼ニ参り候事

但、近来御趣意之節と勝手事

出入方³⁰⁾女房まんちう持参にて礼ニ参り候節、八分³¹⁾位之

品遣し候事成とも、右同断ニ而止ム

三日 朝

向木皿

牛蒡

かつのこ

昼時

雑煮

ぜんざい

小豆汁

もち

向鱈 なし

汁見合

平皿 精進見合

夕節会 常之通

四日 朝 福明し³²⁾

积元信 初退夜、御花・供物上ル事

向木皿 牛蒡

かつのこ

白かゆ

餅 菜こまぐ

昼・夕共、常之通

六日 昼

向鱈

大根

麦めし

青ミ

かつを

积浄誠様初命日

十一日 积尼妙徳様初退夜、御花・供物上ル事

御本家御帳祝^④之事

焼もの

塩いわし

十三日 积尼妙蓮初退夜、御華・供物上ル事

七日 朝 七艸のかゆ

向

牛蒡

塩雑水^⑤

かつを

餅菜こまく

十四日 夕時

向

大根

麦飯

青ミ

かつを

八日 御本家初御命日ニ付、西念寺^③様へ佛参之事

积妙薰尼初退夜ニ、御花・供物上ル事

丹後 塩いわし

十日 昼時

鱈

大根

向

塩鱒

青ミ

酒いり

かつを

弘化五戊申ノ正月十五日

土性、六男

十五日 虎之助、早朝出生

昼時

小豆めし

向

大根

汁

とろゝ

向

大こん

焼物見合せ

青ミ

青のり

青ミ

廿日 昼時

向

大こん

平

ぶり骨⁽³⁶⁾

小豆めし

青ミ

大こん

二日 积元證様

かつを

御祥月御退夜

但し、月と甲子⁽³⁶⁾

黒豆めし

庚申⁽³⁷⁾二者

こんにやく

一 當百⁽³⁸⁾ 壹枚
御供養料

でんかく

一 五拾文 光徳寺⁽³⁹⁾様

寛政五丑正月廿九日

二代目武兵衛母ノ姉、

一 御供物 代拾文 壹文ノヲ

妙宗信女

俗名たき

左海清実母也

十ヲ

天保七申年

二月六日 津山検校⁽⁴⁰⁾

名ハ虎都

二季彼岸

是者年々月日相代り候ニ付、別ニ記之

三月三日 昼祝

安永二巳三月三日 元祖武兵衛祖母

向 青ミ 汁 蛤

かつを 但し見合

大こん

焼物見合 小豆めし

懸物 立雛之画 ひしの餅

寛政十一年未三月七日 二代目武兵衛母ノ実母也

同八日 駿七誕生日

天保五申午年三月八日、一男、未ノ半刻出生、幼名午之助、

後駿七、天赦日^①也、金性

昼 小豆めし

但し、心祝^②之事故、駿七へ焼もの居可申も宜、本人御霊様^③

へ参詣可致も宜候事ナリ

同十九日 つた誕生日

天保十三壬寅年

三月十九日八ツ時出生、つた、金性、前二同断

四月七日 権現様御祭り^④ 祝可申事

因ニ云、銘々誕生日、曆取調べ、二拾八宿^⑤等吟味致候得者、運氣障り有之間鋪事^⑥

天保十四年卯三月廿六日 釈尼妙受 れん実母也

嘉永三戌三月廿七日 夏浄禅定門位 俗名新七

四月十三日

釈妙蓮尼祥月退夜

一 當百 壹枚

一 御供養料 五拾文

光徳寺様

一 御花代 拾文

一 御供物代 拾文

嘉永十丑四月廿日 元祖武兵衛実姉

天保三辰四月十一日 俗名お琴殿

五月朔日 朔 つい誕生日

天保十五辰年五月朔日朝出生、火性、五女目 つい

前二同断

同五日 昼時祝

向 大こん 汁 ふき

青ミ 若め

かつを

焼物見合

小豆めし

懸もの 八幡殿⁽⁴⁶⁾之画 粽備

家内へ粽⁽⁴⁷⁾為祝候事

但、今晚大束家内くすべ候得バ蚊のまじない、しやうぶ湯⁽⁴⁸⁾もよし

享和三亥五月廿日 俗名金三郎⁽⁴⁹⁾

六月朔日

向 大こん 焼物見合

青ミ

かつを

小豆めし

はかた⁽⁵⁰⁾め⁽⁴⁹⁾ 白搔餅⁽⁵¹⁾

川へはまらぬまじない

茄子⁽⁵²⁾から漬⁽⁵¹⁾

当月土用[㊟]

見舞取遣り 別記ニ致ス

十一日 御祥月御待夜^(たむ)

积妙徳様

一 當百 一枚

一 御供養料 五拾文 光徳寺様

一 御花 代拾文

一 御供物 代拾文

十七日

御霊様 御神事

向 大こん

青ミ

はもの皮

焼物見合

小豆めし

六月廿五日

天満宮様 御神祭

向 はもの皮

大こん

青ミ

汁

からし

すりなかし^(細り流し)

たき菜^(叩き菜)

焼物

あじ

塩やき

小豆めし

昼後

一 そうめん

一 酒肴

たこ

六月晦日

住吉様 御祭礼

向

大こん

焼物見合

青こ

はもの皮

向

夕時

さし(刺)さば

す

小豆めし

同 十六日 常之通

昼 番菜 茄子

てんかく

又ハ雷豆腐

享和元辛酉年

一 七月八日 午刻

木性、二代目武兵衛延世

誕生日

そうめん

向

大こん

汁見合

青こ

かつを

但し、中元祝儀者別ニ記之

十九日 御祥月御退夜

寛政九年巳七月廿日

難波喜太夫様神霊

焼物見合

小豆めし

七月十五日

昼精進

向

白瓜

汁

小いも

しそ

からし

一 御花 拾文

一 御供物 拾文

一 當百 壹枚

一 御供養料 五拾文 光徳寺様

一 七月十日 二女目 ちへ誕生日

天保九戌七月十日朝四ツ時

出性、木性、未^(いまだ)痲瘡不致

八月十五日

月見

九月十日

天明四年辰八月十日

二代目武兵衛母ノ実父

同十四日

文政十年亥八月十四日

二代目武兵衛母ノ弟ナリ

同廿八日

文政九戌八月廿八日 れん実父也

九月八日

釈妙薰尼祥月待夜

一 御華 拾文

一 御供物 代拾文

一 當百 壹枚

一 御供養料 五拾文 光徳寺様

九月九日[㊤] 昼飯

向 大こん

青ミ

かつを

汁見合

焼もの見合

小豆めし

九月廿日

報恩講[㊤] 八ツ時御日中

一 御供物 代百五拾文

一 御花 代七拾文

金兵衛殿

御本家店之衆

綿屋 庄兵衛殿

松井 健次

高岡 光順

筒井屋藤兵衛殿

菊 吉三郎様

鹿 おてい殿

平 お亀殿

菊 おいく殿

丸山 正藏殿

富 お竹殿

播 新助

同 おきく

五日講猪之助

天満御坊⁽⁶⁸⁾

廿二日役所守徳兵衛

外へ講内御取持方斗呼事⁽⁶⁹⁾

他向参詣之人へ者岩起⁽⁷⁰⁾ 二本ツ、供養之事

九月十三日

文政九年戌九月十三日 俗名岩松

九月廿三日 御祥月御退夜

寛政十二申年九月廿四日

難波采女⁽⁷¹⁾ 神霊

一 御供物 代拾文

一 御華 代拾文

一 當百 一枚

一 御供養料 五拾文 光徳寺様

夕時御初夜

御法話 善覚寺殿

万事綿庄殿へ相尋候事

九月廿八日

文化七年午九月廿八日

二代目武兵衛実母ノ弟

嘉永三戌年九月廿八日暮半時出生、七女目

この、誕生日、金性

十月四日 祥月退夜

积元信 俗名十九蔵

一 御華 代拾文

一 御供物 代拾文

一 當百 一枚

一 御供養料 五拾文 光徳寺様

十一月三日 年号不知、戌十一月三日

知空信女 二代目武兵衛母方祖父ノ妾也、後妻ニ成ル

同 廿二日 俗名丹波屋久兵衛

同 廿七日 大御待夜

一 御華 代拾文

一 御供物 代拾文

可相成丈(あいなるべくだ)ヶ京都御本山へ御礼可申上候事

十二月朔日

向 大こん 汁見合

青ミ

かつを

やき物見合 小豆めし

乙子朔日(おとし) 小豆餅 家内祝

但、当月寒ニ入

小豆餅 ねぶか汁

同九日 御祥月待夜

积浄誠様

焼物見合

小豆めし

同廿四日 夕

餅搗

一 御花 拾文

一 御供物 拾文

一 翌十日、西念寺江佛参可致事

一 當百 一枚

西念寺様へ

向 青ミ

汁見合

但、四月八日 浄守様

五月八日 浄喜様

右御両佛共、西念寺様へ杓匁ツ、持参ニ而参詣之事

心味 ぜんさる

委細別ニ記之

同十七日

家内 そふじ②

安政六己未年 积妙浄 俗名ちへ

但し、祝日定日ニ御座候へ共、夏分そふじいたし置候事

十二月十四日

向 かつを 汁見合

青ミ

春秋彼岸之志

一 白銀 杓匁

大こん

光徳寺様

御当り之

西念寺様

佛様御一方

壹匁ツ、両寺へ

上候事

但し、春秋共春々度ニ書附相渡、御寺へ相納候事

一 二季彼岸 御佛当り日

一 代式拾文位

御本家

平 久兵衛殿

平 金兵衛殿

同 林兵衛殿

菊 吉三郎様

鹿 おてい殿

筒 藤兵衛殿

丸山 正藏殿

メ

一 代拾式、三文位

神崎屋利兵衛殿

奈良屋平藏殿

茨木屋清兵衛殿

綿屋 源七殿

戸屋 新助殿

十二月朔日^(まで)十日迄

長吏^(まで)ト申、四ヶ所之者、米もらいニ参ル、少^(まで)ツ、遣し可申

一 事

一 節季候^(せきせう) 親方へ一升ツ、

大黒舞^(おおくろ) 下番へ五合ツ、

天満山^(てんまん)

垣外 嘉七

下番 与八

一 毎月布施米五合ツ、

一 式百文 垣外番

綱貫^(つな)奉賀^(ほうが)

一 式百文 髪結^(かむむす)へ

風呂ノ奉賀

一 式百文 下役へ紙子^(かみこ)

奉賀として

一 毎合月別 貳百九拾文ツ、

一 六月・九月祭り辻合蠟燭百文ツ、

一 惣会所⁽⁸²⁾へ夜分勘定詰番代り雇賃貳百文

一 自身番⁽⁸³⁾雇賃百貳拾四文

一 貳百文ツ、 自分

中元歳暮

髪結へ祝義⁽⁸⁴⁾

外ニ子供三人中ニ而貳百文ツ、遣ス

一 白銀 壹両ツ、

中元・歳暮とも 御年寄⁽⁸⁴⁾様

一 同 三匁 町代⁽⁸⁵⁾へ

右同断

一 貳百文 下役者人

右同断

又

一 白銀 壹匁五分ツ、

右同断

光徳寺様
西念寺様

外ニ三拾文ツ、西念寺⁽⁸⁶⁾鉦坊主へ

一 同 壹匁 太融寺⁽⁸⁶⁾様

右同断

中元

一 小紋切⁽⁸⁷⁾ 八尺 下女へ

貳百文草履料

歳暮

一 前だれ⁽⁸⁸⁾ 一ツ

ひもとも

貳百文 草履料

貳百文 鏡餅料

中元・歳暮とも

一 白銀壹両 下男へ

貳百文 草履代

貳百文 鏡餅料

中元・歳暮二季⁽¹⁾鹿物⁽²⁾代

一 金貳百足ツ、乳母へ

外ニ吉歩式朱ツ、年々両度分遣ス

是ハ⁽³⁾裕⁽⁴⁾トひとへ物⁽⁵⁾、右着料として

中元・歳暮

下女同様、前たれ其外遣し候上、足袋一足、引摺⁽⁶⁾一足遣し候事

一 鏡餅 一重

代貳匁

一 鹿物 代三拾匁

一 足袋 一足 代貳匁五分

一 ⁽⁷⁾セきだ⁽⁸⁾ 一足 貳匁五分

子供へ

〆

中元・歳暮

一 貳匁ツ、

炭代

三味

畳代

けいこや

同

一 貳匁ツ、

畳代・炭代

手習師家

松林⁽⁹⁾・七夕

壹ヶ年中花代

一 貳匁五分 西念寺様へ

左之通書附致し頼置候事、都而御退夜ニ建ル

正月

二月

二月五日 二日五文
八日三文
十一日五文

二月拾五文
八日三文
十一日五文

彼岸中拾貳文

三月 二日五文ツ、
四月 八日三文ツ、
五月 十一日五文ツ、

六月 二日五文
八日三文
十一日拾五文

二月五日
八日三文
十一日拾五文

七月

二日五文
八日三文
十一日五文
盆拾五文

八月

二日五文
八日三文
十一日五文
彼岸中拾式文

九月

二日五文
八日拾五文
十一日五文

十月

二日五文
八日三文
十一日五文

十二月

二日五文
八日三文
十一日五文

正月花拾五文

右之外、閏月、亦ハ新佛者其節建花致候事、右ニ而先一ヶ年中花有之候事

中元

一 式匁

西念寺様

油代

都而西念寺様へハ春一時ニ相納候事

祥月・彼岸之分花代とも

天保十一子年五初ル

一 十月六日

報恩講

御堂 五日講

入用年番取斗

五日講中

平 芳兵衛殿

武兵衛殿

林兵衛殿

久兵衛殿

金兵衛殿

此方

〆

中元・歳暮一軒方

猪之助へ 式匁ツ、

女房へ 老匁ツ、

〆年番取斗之事

<p>右講之儀者、先年平彦別宅宗兵衛殿始、平久殿・此方申合組立、大御本家様⁽⁶⁶⁾へ御届ケ申上、大旦那様御承知之御事ニ御座候、其後御門跡様御下向之節、亦別家⁽⁶⁷⁾御座へ這入候事不能候ニ付、退講之人も出来候趣ニ而、平七郎兵衛様御年番之節、御下向者元5年と難波御堂報恩講之節も、別家衆・供女中、亦ハ外こなじミ誘引之人ハ相断候ニ相成候事、二代目武兵衛無量講ト相唱、初年番致候事</p>		<p>中元 一 當百 一枚 油代 太融寺様</p>
<p>一 式百貳拾四文 尼講懸錢 光徳寺様</p>	<p>外二 米一升</p>	<p>壹ケ年分 一 百貳拾四文 天満御堂 廿二日講</p>
<p>月と拾文ツ、百文、外花斗 但、正・五・九、三ヶ度差紙来 参詣不致ハ壹封入不申候事</p>	<p>中元・歳暮 一 百文ツ、 廿二日講徳兵衛へ</p>	
<p>御堂彼岸御座料 一 白銀三匁 御使僧⁽⁶⁸⁾様 一 同 貳匁 五日役所へ 一 百文 御花代 一 五拾文 供男へ</p>	<p>安政二卯年 一 銀九匁 西念寺様 祥月志 一 元證様 同 妙徳様 同 妙蓮尼 同 元信</p>	
<p>二月三日 彼岸 同 五日 同</p>	<p>元證様 元信</p>	

八月十二日同	妙徳様
同 十四日同	妙蓮尼
〆右各壹匁ツ、	
安政四年巳年	
一 銀八匁	
祥月志五件	彼岸二月ハなし
八月三日	元證様
五日	元信
九日	妙薫尼
同五午年	
一 三匁	西念寺様
二月五日	元信
同 九日	妙薫
八月十四日	妙蓮

安政二卯年改	
餅搗	三ツ
一 壹升五合	一重
荒神様	
一 壹升六合	八重
御佛前	二重
神棚	二重
稻荷様	二重
布袋様へ	二重
〆	
大小二ツ	
一 壹升	一重
玉寿院江	
一 壹斗九合	小餅
一 五升	搔餅
白二升五合	
砂糖二升五合	

〆式斗

安政五午年春改

覚

年始御礼

一 白銀

壹匁五分

外二冊文 鉦坊主へ

午年中花代

一 同式匁五分

一 同三匁

彼岸之志

前二有之

一 同式匁

油代

西念寺様

此分一包にして

但、光徳寺様者祥月相勤候事

彼岸之志者懸銭有之候ニ付止メル

年始御礼

一 壹匁五分

光徳寺様

同

一 壹匁

太融寺様

二月三日

西念寺様江

元證様

妙徳様

妙蓮尼

妙薫尼

元信

〆五佛祥月志

一 銀五匁 上ル

安政五戊午年冬

餅搗

三ツ

一 壹升五合

一重

荒神様

一 壹升	大小	一合ツ、かず
玉寿院江	一重	十六、八重
一 五升	かき餅	
白		
一 貳升五合	同	
砂糖		
一 二升五合	二ツ	
室江	一重	
一 同	二ツ	
こし場	一重	

一 壹升五合ツ、	安兵衛
半七	
一 貳斗	小もち
〆三斗九升六合	
未年冬右同断	
万延元申年	
十一月廿七日	但、十九日おついで嫁入可致候ニ付延引
報恩講	
一 御華	七拾文
一 御供物	百五拾文
一 朱ろうそく二挺	四拾八文
一 御香	有合セ
一 貳匁	光徳寺様
一 當百一枚	御代僧へ
御供養料	
一 同 一枚	同
汁 なし	

猪口

いも

めし

こんにやく

平

かみなり

とうふ

酒なし

文久二壬戌年

一 拾匁五分

西念寺

但、五匁 祥月志

积元證様

积妙徳様

积妙薫

积妙蓮

积元信

〆

壹匁 秋彼岸志

閏七月三日 积元證様

貳匁 盆油代

貳匁五分 年中花代

〆

亥年分

祥月志

一 五匁

积元證様

积妙徳様

西念寺

积妙薫

积妙蓮

积元信

〆

春彼岸志

一 貳匁

二月三日

积元證様

五日

积元信

秋彼岸

一 三匁

一 三匁

八月三日

积妙徳様

九日

积妙薫

十四日

积妙蓮

一 式匁 盆油代

一 式匁五分 亥年中花代

〆拾四匁五分

八十五匁

此金式朱

十三匁壹文

文久二年戊九月十一日請写

老松町平野屋武兵衛、女房きた、悴駿七・同悴虎之介、娘この、下
女すへ・たけ・まつ、下人半七、福太郎〆十人

記

祥月志

一 白銀五匁

二月三日

积元證

九月九日

积妙薫

十月五日

积元信

彼岸之志

一 白銀式匁

二月十二日

积妙徳

积妙蓮

二月十四日

七月盆油代

一 銀式匁

子年中花代

一 式匁五分

〆拾壹匁五分

右之通御供養奉願候、以上

子年正月

老松町

平野屋武兵衛

西念寺様

御納所

子正月三日

一 当百弍枚

福原氏へ□□代^(元永カ)

御初穂料遣ス

元治元甲子年宗旨手形写

老松町平野屋武兵衛、女房きた、悴駿七・同女房すへ、同悴虎之介、

娘この、孫福太郎、下人作兵衛・辰蔵、下女たけ・まつ、^〆拾壹人

丑年冬歳暮

一 八匁六分

御年寄様

一 六匁

会所へ

一 四匁

下役者人

^〆

年始

一 当百一枚ツ、

光徳寺様

西念寺様

太融寺様

^〆

慶應二寅年

彼岸之志

一 二月三日

积元證

一 同 五日

同元信

一 九月十二日^ハ

同妙徳

一 同 十四日

同妙蓮

一 同 十四日

同妙浄

^〆五匁

祥月忌

一 二月三日

积元證

一 六月十二日

同妙徳

一 九月九日

同妙薫

一 四月十四日 同妙蓮
 一 十月五日 同元信
 一 十二月十四日 同妙淨
 〆六匁

一 寅年中花代 貳匁五分
 一 同盆会油代 貳匁
 〆拾五匁五分

寅十一月廿七日

報恩講

一 一百五十文 花
 一 四百四十八文 御供物
 一 貳百文 光徳寺様へ
 一 貳百文 くやう料
 一 百文 代僧へ

慶應三

卯年正月

覚

二月三日 积元證
 六月十二日 同妙徳
 九月九日 同妙薫
 四月十四日 同妙蓮
 十月五日 同元信
 十二月十四日 同妙淨
 〆銀六匁 祥月志

彼岸之志

二月十四日

一 銀壹匁ツ、 积妙蓮
 同妙淨

卯年中花代高直ニ付

一 銀五匁
 同盆油代
 一 同三匁

右者例之通宜奉願上候、以上

卯正月

老松町

西念寺様

外二

一 拾貳匁

右者 积妙浄月牌料為願上候、位牌へ法名御入記可被下候、出来候上
代料可被仰下候、已上

辰年

覚

一 二月三日

积元證

六月十二日

同妙徳

九月九日

同妙薫

四月十四日

同妙蓮

十月五日

同元信

十二月十四日

同妙浄

〆祥月志銀六匁

彼岸之志

一 八月五日

积元信

一 八月九日

同妙薫

〆貳匁

一 銀五匁

辰年中花代

一 同三匁

盆油代

合拾六匁

右之通宜奉願上候

卯極月

平野屋

西念寺様

武兵衛

明治二巳年

覚

一 二月三日

积元證

六月十二日

同妙徳

九月九日

同妙薫

十月五日 同元信

十二月十四日 同妙浄

〆祥月志銀五匁

一 二月九日 彼岸之志

十月五日

巳年中花代 五匁

盆油代三匁

合拾五匁

右之通宜奉願上候

平野屋

武兵衛

巳正月

西念寺様

卯年九月廿七日 七ツ時

四ツ時

報恩講

一朝 四ツ時 御退夜

光徳寺様御代僧

貳百文 光徳寺様

同 御供養料

百文 供へ

七ツ時御戸講 三土殿頼ム

一金貳朱 御本山様へ

當百三枚 講内へ

同 貳枚 尼講へ

金 壹朱 御寺様へ

三百文 鹿末料

但、常之御座之節ハ

一 五百もん 御本山へ

三百もん 講中へ

金一朱 御僧へ

貳百文 鹿末料

貳百文 尼講内へ

(付紙)

「但、五百もん 報恩講・御戸講内へ常例として

貳百文 右同尼講内へ

貳百文 浄圓寺殿供男へ

貳百文 光徳寺様へ報恩講志

貳百文 同御供養料同

貳百文 法専寺殿へ同

百もん二ツ 下女兩人へ志として

三百もん 代僧法専寺殿へ供養料

外ニ

貳百もん 同人殿へ菓子料として

七拾四忌ニ付

貳貫文 家内へ志として貳百文ツ、十人へ」

(付紙)

「内三両三步一朱

但、 貳朱 報恩講浄圓寺様へ

貳朱 御戸講へ御本山様へ

壹朱 学法場御普請寄附

貳朱 御堂様へ御経料九月廿四日

祖母三拾三回忌ニ付

右同断光徳寺様へ志として

右同断代僧志として

壹朱 行水湯わかし代足として

貳朱 米つき白代足として

壹歩貳朱 砂金石二ツ代織有

(裏表紙)

「老松町

平野屋武兵衛」

注

- (1) 大阪大学文学部日本史研究室編・発行『難波家(平野屋)史料目録』、一九九八年。
- (2) 脇田修・中川すがね編『幕末維新大阪町人記録』、清文堂出版、一九九四年。
- (3) 主なものをあげておく。中川すがね「歌三味線の周辺」(『身分的周縁』部落問題研究所、一九九四年)、中川すがね「大坂町人の経済意識―華井の見た幕末維新―」(中部よし子編『大坂と周辺諸都市の研究』清文堂出版一九九四年)。
- (4) 懸物 座敷の床の間に飾られる掛軸のこと。
- (5) 小松引 小松引とは正月初子の日に野に出て小松を引き抜いて長寿を願った平安貴族の行事。この日若菜を摘んだりもした。子忌み、子の日遊びなどともいった。
- (6) 呉山 和田呉山(？)一八七〇) 江戸後期の画家。大坂生。名は弘毅、通称房吉。森徹山の門下で、人物花鳥を得意とした。四三才で落飾し、名を空相と改め、法諱を月心、阿閑と称す。のち京都神光院に移り精進苦行し、法務の余暇に白衣観音像を描き、民衆に施与した。
- (7) 人丸 柿本人麻呂。七〇八世紀の歌人。江戸時代は和歌・学問・火防・安産・眼病などの神として崇められた。
- (8) 山草 ウラジロをいう。特に正月の飾り用のものをさす。江戸時代には正月近くになると、行商人が売りにきた。
- (9) 折敷 おしき。檜のへぎ板などで作った縁つきの方形の盆で、食膳の一種。近世には足を付けたり、塗物も現れた。
- (10) 佛器 仏にささげる供物を盛る器。

- (11) かやく 料理の具のこと。
- (12) 或人曰ク 第八代宗主蓮如が真宗教義を平易な消息(手紙)の形式で記した五帖八十通の「御文章(御文)」の第一帖一通目。
- (13) 荒神 竈の神。仏・法・僧の三宝を守る三宝荒神と混同されて火を防ぐ神として信仰された。竈の上に神棚を作って祀られる。
- (14) 神明 天照大神の称。
- (15) 大福 おおぶく。大福(服)茶。元旦に若水で点てた茶に、梅干・山椒・昆布・黒豆などを入れて飲むもので、一年中の悪気を払うとされた。
- (16) 雑煮 大坂では元旦と三日には白味噌で丸小餅を焼かずに入れる雑煮、二日にはすましに焼いた丸餅と水菜を入れることが多いとされる。武兵衛は元旦の味噌雑煮にも焼いた餅を使い、三日には甘いもの好きのためか、ぜんざいを雑煮がわりにしている。
- (17) かちん 搗飯(かちい)が変化した餅をあらわす女房言葉。
- (18) くしがひ 串貝。串にさして干したあわび。
- (19) 平かつを サバ科ソウダガツオ属のヒラソウダとマルソウダをさす。初秋日本海で六〇センチほどに育ったものが群集したのを漁獲した。
- (20) 年酒 ねんしゅ。年始の祝に出す酒。
- (21) 駿七 二代目平野屋武兵衛の長男で父同様平野屋孫兵衛方に仕えていた。
- (22) 手札入 手札、すなわち名刺を入れるもの。年始の挨拶では座敷に上がらず、玄関にしつらえた表礼場に手札を入れてすませることもあった。
- (23) 二枚折屏風 二曲屏風。鴨居に届く高さで、幅は片面一畳分。

- (24) 向鱈 向付(むこうづけ)といわれる膳部の中央より向側に付ける器ないし料理で、本来は砂糖酢・胡麻酢などであえた鱈(なます)仕立てであるが、刺身も用いられた。
- (25) 酒いり 酒で煎りつけて酒の香りを付ける料理。
- (26) 常之通 武兵衛家の常の夕食がどのようなものであるかわからないが、大坂では一般的には昼食が最も重要な食事で、昼食時に飯を炊いておかずのついた食事をした。夕食・朝食は冷や飯に香の物が中心で朝食は茶がゆにする場合もあった。
- (27) 退夜 速夜。本史料では「待夜」とも表現されている。前夜に行われる法事のこと。注(61)参照。
- (28) 平皿 底が浅く平たい漆塗りの椀、またはそこに盛る料理。
- (29) 身くじら 鯨の赤肉の部分で皮鯨に対する語。大坂では鯨肉と水菜を煮込むはりは鍋がよく食べられた。
- (30) 出入方 平野屋武兵衛家を得意先として出入する者で、大工・畳屋・女髪結い、青物などの行商人・下肥汲み取りの百姓などがいた。
- (31) 八分 銀八分。
- (32) 福明し ふくあかし。大坂では正月四日に三が日の残り物をごった煮にして食べたことから、福沸かしが変化してこの言葉になったという。
- (33) 西念寺 大阪市天王寺区餌差町にある浄土宗寺院。平野屋五兵衛などの墓がある。
- (34) 帳祝 大坂では正月十一日に、帳簿を新たに綴じてこれを祝った。
- (35) ぶり骨 京坂では正月二十日を骨正月といい、正月用の塩鯊などの骨と大根などで粕汁を作り食べた。
- (36) 甲子 かつし・きのえね。十干と十二支を組み合わせたものの第一番目であるため重んじられ、甲子待などの行事を行った。甲子待は、甲子の日の子の刻(午後一時から午前一時頃)まで起きていて、商売繁昌などを願い、二股大根や黒豆入の茶飯などを供え大黒天を祀るものである。
- (37) 庚申 こうしん・かのえさる。十干と十二支とを組み合わせたものの第五七番目。この夜庚申講の連中は寝ずに青面金剛(しょうめんこんごう)や猿田彦を祀り、夜明けまで宴会や歓談を行った。大坂ではこの日こんにやくを食べる風習があった。もとは大坂四天王寺の青面金剛童子の参詣人を目あてにこんにやく田楽が売り出されたことによる。
- (38) 當百 当百銭と呼ばれた天保通宝のこと。天保六年(一八三五)から発行された百文通用の長円形の銭貨であるが、大坂では評判が悪く、銭との間で相場が成立した。
- (39) 光徳寺 大阪府柏原市の信貴山南斜面にある真宗大谷派の寺院。平野屋武兵衛の自家孫兵衛の自家にあたる平野屋五兵衛は東本願寺初代講師の恵空に師事し、同家は代々同寺、また大坂北久太郎町にあった同寺支坊の門徒として活動した。平野屋武兵衛家は元来太融寺の檀家であったが、門徒として光徳寺との関係が深い。
- (40) 津山検校(？)一八三六、大坂の初代津山検校。慶之一または虎一。生田流箏曲および野川流地歌の演奏家・作曲家。豊賀四度・中川勾当を経て、寛政七年(一七九五)に検校となった。野川流長歌五十番の制度を定め、津山撥といわれる撥の改良も行った。平野屋武兵衛はこの人に師事し、自ら三味線の演奏や作曲を行っている。
- (41) 天赦日 曆注で四季に各一回ある天がすべての罪を許すという最上の吉日。春は戊寅、夏は甲午、秋は戊申、冬は甲子の日。

- (42) 心祝 形式張らない心ばかりの祝い。内輪の祝い事。
- (43) 御霊様 大阪府中央区淡路町五丁目にある御霊神社。江戸時代には旧摂津国津村郷の産土神として大坂町人に信仰された。
- (44) 権現様御祭り 天満の川崎東照宮。大坂城主となった松平忠明が元和三年(一六一七)に建て、現在は廃絶している。徳川家康の忌日四月十七日の前後五日の権現祭の時だけは町人にも参詣が許された。本文の七日は十七日のまちがいか。
- (45) 二拾八宿 天球における天の赤道を二八の星宿に分割したもので、元来中国から伝わり、曆注に記されて占星術に使われた。
- (46) 八幡殿 八幡太郎源義家のことか。
- (47) しゃうぶ湯 端午の節句には邪気を祓うために菖蒲や蓬を軒や屋根に付けたり、菖蒲の葉・根を風呂に入れたりした。
- (48) 金三郎 二代武兵衛の早世した兄。
- (49) はがため 正月と六月一日に長寿を願って鏡餅・大根・押し鮎・勝栗・飴など固いものを食べる行事。平安時代の宮中行事にあるが、江戸時代には民間でも広く行われた。
- (50) 白搔餅 この場合は白餅をなまこ形につくり、小口から薄く輪切りにして干したものだ。
- (51) から漬 ふつうより塩辛くした漬け物のことか。
- (52) 土用 立夏の前の十八日間。この間に暑中見舞いの品を親しい間で贈り合う風習があった。
- (53) すりなかし すり流し。魚やいも・茄子などの野菜、豆腐などを摺ってだした汁物。とろりとして、冷たくしてもおいしいので夏季によく作られた。この場合は大坂の夏の名物であったハモのすり流しと考えられる。
- (54) たゝきな 刻んだ菜のこと。
- (55) 七月十五日 盆のため昼は精進料理である。
- (56) さしさば 背開きの塩鯖二尾を頭のところで刺して連ねたもので、盆の贈り物であった。この場合酢でしめてしめ鯖にして食べたと思われる。
- (57) 番菜 野菜を中心としたふだんのおかず。
- (58) 雷豆腐 豆腐をくずしてごま油で炒め、醤油やネギで味付けした料理。江戸時代の豆腐料理書『豆腐百珍』にも登場する。
- (59) 難波喜太夫 初代武兵衛の父。岡山藩士ゆかりで、母の采女の婿となった。注(70)参照。
- (60) 九月九日 重陽の節句。幕末の大坂町奉行久須美祐雉は随筆「浪花の風」の中で、「重陽には、栗、柿、葡萄を賞玩す。家々に儲置て、来る人毎に出してもてなしとす。烹物には必ず松菌を用ひ、魚類ははもを用ること通例なり。」と書いているが、武兵衛家の料理はかなり質素である。
- (61) 報恩講 浄土真宗では宗祖親鸞に対する報恩謝徳のため祥月命日十一月二十八日の前後に報恩講の法要を行った。民間では「御取越」といつて本山の法要とずらして営まれることが多かった。前夜の速夜、午前中の晨朝(しんちょう)、正午頃の御日中、宵の御初夜と、二日にわたり動行が続き、精進料理のもてなしが行われた。
- (62) 御花ろうそく 花模様を描いて彩色した絵蠟燭。
- (63) 猪口 上が開き、下のすばんだ盃型の器で、刺身や酢の物などを入れる。
- (64) 才切 賽目(さいのめ)切りのことか。
- (65) 菓子椀 魚、鶏肉、野菜などを入れた、実の多い汁もの又はそれ

を盛る器。茶懐石での煮物椀、本膳料理での平、江戸での椀盛りにあたる。

(66) 臺引 台引き物のこと。客への土産として、膳部に添えて出す肴や菓子をさす。

(67) 揚こんぶ 花揚昆布とも。長さ約七センチメートルくらいの長方形に切った昆布を油で揚げたもので、精進料理の台引き物としてよく使われた。

(68) 天満御坊 大阪府北区天満四丁目にあった興正寺別院のこと。かつては西本願寺の脇門跡であった。

(69) 岩起 大坂名物の菓子岩おこしで、粟のかわりに米を細かく砕いて水あめと生姜・ゴマなどを混ぜて固め、堅い。

(70) 難波采女 初代武兵衛の母で下津井祇園社の神子(みこ)であった。

(71) 乙子朔日 十二月朔日に餅を搗いて食べると水難を免れると信じられた。

(72) ねぶか ねぎ。

(73) そふじ 正月の準備をかねて十二月十三日頃に煤払いが行われた。

(74) 長吏 大坂には天王寺(悲田院)・高田、道頓堀、天満には「四ヶ所(しかしよ)」と呼ばれる非人組織が集住する垣外(かいと)があり、各垣外には長として長吏が存在した。大坂の各町には所属する垣外から垣外番が派遣され、町の木戸番などをとめた。

(75) 節季候 江戸時代の門付芸人。歳末、裏白などで飾った編笠をかぶり赤い布で顔を隠した異様な風体の芸人が民家を訪れて、「節季候、めでたい、めでたい」などと祝言を唱えたのでこの名がある。嘉永年間(一八四八―五四)には大坂などでは姿を消したといわれるが、本史料では垣外から派遣された非人が節季候や大黒舞を行っていたこと

がわかる。

(76) 大黒舞 正月の門付芸で、福神の大黒天に扮した芸人が各戸をめぐる祝言を言い立てる風俗が室町時代からあった。近世大坂では非人が頭巾をかぶり大黒天の仮面を着けて、槌を振りながら、三味線にのせて招福を祈る歌をうたい踊ったが、のち緋縮緬の投頭巾だけつけて巡回する風が生まれたという。

(77) 天満山 天満垣外のこと。注七四参照。

(78) 綱貫 つなぬき。牛の皮で作り、底に鉄の釘を打ったくつ。

(79) 奉賀 奉加。元来は神仏への寄進であるが、ここでは町関係者への祝儀をさす。

(80) 髪結 町雇いの髪結。町会所に髪結床を設けて会所守を兼ねていた者が多い。

(81) 紙子 上質の厚くすいた和紙に柿渋をぬり、乾かして揉み、仕立てた衣服。軽くて暖かいため防寒や旅行用に使用した。

(82) 惣会所 近世大坂市中は北組・南組・天満組の三郷に分けられ、各郷に惣会所を置き、惣年寄や惣代・手代などの雇人が詰めて、事務を執った。

(83) 自身番 元来は町の四辻や町会所に置かれた番所で町人が輪番で警備をすることであるが、本史料のように町人が金を出して番人を雇うことが多かった。

(84) 御年寄 老松町の町年寄。町内に居住する家持町人から選挙などで選ばれた。

(85) 町代 老松町の町会所に詰めて町の仕事を行う雇われ人。

(86) 太融寺 大阪市北区にある真言宗寺院。武兵衛家は元来同寺の檀家である。

- (87) 小紋切 小紋の布地。小紋は布地に霰や小花など種々の細かい模様を一面に型染めしたもので、江戸中期以降流行した。
- (88) 前だれ 衣類の汚れを防ぐために腰から下にかけて布。
- (89) 麩物 衣物(そぶつ)、又は惣物(そうぶつ)とも。主人から奉公人に与えるお仕着せなどの品物。
- (90) 袷 裏地をつけて仕立てた着物。近世では陰暦四月一日より五月四日まで、および九月一日より八日まで、これを着るならわしであった。
- (91) ひとへ物 単衣。裏地がついていない着物で夏に着る。
- (92) 引摺 引摺下駄のこと。台を中央で前後に切り離し、革を鋏打ちしてつないだ下駄。
- (93) セきだ せったともいう。竹皮草履の裏に革をはった草履で、大坂の名産品でもあった。
- (94) 松林 松囃子・松拍子のことか。元来は正月二日(のち三日)の夜に諸侯を殿中に召して行なう語り初めの儀式のことであるが、寺子屋でも正月に事始めを行い、その時に寺子から師匠に祝儀を出したものと思われる。
- (95) 御堂 この場合は大阪市中央区久太郎町四丁目にある真宗大谷派難波別院のこと。南御堂とも呼ばれる。
- (96) 大御本家様 武兵衛の本家である平野屋江森孫兵衛の本家にあたる今橋一丁目の本両替平野屋高木五兵衛。天王寺屋五兵衛について古い由緒を持つ本両替で、しばしば幕府の御用両替である十人両替にも任じられた豪商である。
- (97) 亦別家 別家の別家。たとえば平野屋武兵衛は平野屋五兵衛の亦別家である。
- (98) 使僧 門徒や門徒・末寺等が結んだ信仰組織である講に対して、本山から派遣される僧侶。

